

Lafcadio Hearn の Byron 観

楠 本 哲 夫

19世紀 英国詩界に澎湃として湧き起ったロマンチズムは 極端な旧道徳律の讃美、高揚への詩風に大衆があいて 新風を渴望した時代背景を母胎とした reaction であった。

当時の詩風にうたい継がれた 冷やかな哲理と冥想的傾向に人心は倦いた。

そして人々は神よりも 血の通う人間の喜怒哀楽^{あら}の露わな激情を望んだ。口には出さずとも、 そう感じ そのような詩人の出現をのぞみ、そのような詩^{うた}を憧れた。

the Lake poets 湖畔詩人群のうたい継^ついだものが もはや たいくつな饒舌^{にようぜつ}にきこえていた。

Wordsworth がうたうものは 人々には理解できず たいくつなものでしかなかった。

Coleridge, Scott, Southey のうたは fairy tale としてきこえた。

人々は いま 彼らの心に変化を投げかけてくれることのできるうたを渴望していた。変化を与えてくれるうたならば ちょっぴり不道徳なものであれ ちょっぴり無神論であろうと 彼らにとって、むしろ、さわやかな一服の清涼剤となった。

美德と宗教と靈魂の問題が あまりにも多く うたわれすぎたために 大衆は これに飽食した。 かくて——

the Satanic School ‘悪魔派’ がうたい始めたとき the Lake school は 全く、大衆の興味関心を失ってしまった。 読者は誰も 湖畔詩人たちのうたを

見むきもしなくなった。 Sir Walter Scott 卿すら 1814 年には はやくも詩をかくことを やめねばならなくなった。

かくて Byron の Cynical なすばらしい うたごえが 人々の心に sweet なメロディ 旋律を奏でつつあった。

かくして 悪魔と神を同居させた鬼才 Byron の出現により 19世紀 英国詩界に華麗なる Byron 時代の到来をみたのである。

人の世に永久の平和はありえない。平和はやがて揺れつつ動乱を生む。動乱の世は いつも 天才の出現を 待望し 英雄の到来を希求する。

フランス革命, Napoleon の出現, 没落 ^{いろうど} が彩る動乱, 混乱の18世紀~19世紀は 文学の世界では 浪漫主義が潮^{うしを}の如く高まった時代である。Byron はこの時代を象徴する詩人である。動乱の時代なればこそ 英国詩史上, 最大の才幹 George Gordon Byron が誕生したのである。

the Satanic School の三ツ星 (Byron, Keate, Shelley) の巨頭 Byron は 生れ出づるべくして出現したのである。

天才の出現は 時代背景を母胎とする如く そしてまた さらに 最大のモーメントとして その承^うけついで家系の血の中にこそ その胚珠を求めることができる とするならば——— Byron は 二つのモーメントの接点において その誕生を運命づけられていたのである。 その母胎は 由緒ある, かつ嵐と悲運の Byron 家 (父方), Gordon 家 (母方) の家系の血である。

鬼才 Byron の生涯を語ることなくして, Byron 詩を語ることはできない。Byron の生涯は異常なまでに幸運であり, 同時に, 異常なまでに不運であった。由緒ある名門貴族の出としての, 諸の栄光^うを嗣^つぎながら しかし 極度に不幸な性格をも承けついでいた。Byronic heroes が つねに矛盾の陰影を曳きづりゆくのは そのためである。

Byron 家（父方）、Gordon 家（母方）の家系図を開いて 彼の祖先の血を
探ってみよう。それは あらしと悲運の家系である。

George Gordon Byron は 1788年、1月22日、ロンドンの Holles Street 16
番地に生れた。詩人 Byron は すなわち 第6代バイロン卿 である。

北欧 Viking ヴァイキングの勇猛な血をひく Byron 家は イギリスでは最
も古い由緒ある家柄のひとつで 11世紀頃は Burun 家とよばれた古代ノルマ
ンの豪族であった。

1066年 その豪族のうちの一人が Normandy より征服王 William 1世に随
従してイギリスに渡来。次第に Nottingham, Rochdale および Clayton を領
有する。

1170年 Henry II, Thomas à Becket 殺害の贖罪のため Newstead Abbey を
建立。

Edward III のとき John Byron が Calais の包囲戦でたてた勲功によって Sir
（準男爵）を授けられた。

1540年 その後裔の一人、“大きな髯をたくわえた小さな Sir John” が Henry
VIII から Newstead Abbey および付属地の払い下げをうけてから その子孫は
忠実にそこにすんで動かなかった。

1643年 その家系の一人 Sir John Byron は Charles I 世の忠実なる支持者
として騎兵隊を指揮し もちまへの蛮勇をふるって無鉄砲な戦闘を行ったが
その戦功によって 国王から Rochdale の男爵 Baron に叙せられ イギリスの
貴族に列せられた。初代 Lord Byron of Rochdale 誕生。

Richard, 2nd Lord Byron

William, 3rd Lord Byron は17世紀頃まで生きていたが このころから む
かし修道院だった Newstead の邸館にまつわる不吉な予言がしだいに現実とな
ってあらわれるようになってきた。そして

4th Lord Byron William 1669～1736 は 三度目の妻 Frances との間に

5th Lord Byron William 1722~1798 を生む。

この5代目は 隣家の従兄弟の Chaworth を ロンドンの居酒屋で 口論の末 決闘して (1765) 殺し 貴族院の査問をうけ 貴族だけに適用される特別法により無罪釈放となった。しかし 自由の身となって Newstead に戻ってからも 狂気じみた悪行を重ね “悪殿様” とよばれ嫌われた。しかし

その弟の John Byron (1778) ——詩人の祖父——は、まっとうな海軍提督として豪胆な性格で アメリカ独立戦争に艦隊を指揮。やはり運命の星を背負い 海上に乗り出すと たちまち暴風雨にあい “あらしの ジャック” とよばれたが 勇猛な提督だった。

John Byron (1756~1791) は 名海軍提督の長子。詩人の父。 フランス士官学校を出て 帰国, 近衛連隊の士官。陸軍大尉。20才でアメリカ独立戦争に出征。非常に美男子であったが, むこうみずな行動と賭博による莫大な負債のため “気狂いジャック” と綽名された。

22才のとき ロンドン上流社交会の最も美貌の Conyers 侯爵夫人と恋におち 駆けおちして フランスで 彼女は

1783年 娘 Augusta Byron (詩人の異母姉) を生み 1784年 死亡。

1785年 John Byron 大尉は Catherine Gordon of Gight (ゴードン家の令嬢。詩人の母) と結婚。

キャサリンは 小ぶとりの, 美人とは縁遠い女性だが 両親に死別, 2万3千ポンドの遺産を相続していたので 負債に苦しんだ大尉は この女性と結婚した。

以上 バイロン家の家系であるが 次に 母方 Gordon 家の家系を概観してみよう。

詩人の母 Catherine の生家 ゴードン家は Scotland の Aberdeen の高貴な

名門の家柄である。

初代の Gight ガイト荘園の領主 Sir William Gordon の父は Huntly 伯爵であり 母は England 王 James II 世の王妹 Annabella Stuart であった。

しかし このような栄光に輝いてはじめられた家門の歴史には つねに不吉な運命がつきまとして離れなかった。

初代 Gordon は溺死し

第二代 Alexander Gordon は殺害され

第三代 及び第四代 両 Gordon は 殺人をおかし 絞首刑に処せられ
そののちの代々の荘園領主たちも 兇暴な悪行をつづけた。

Catherine の父も 祖父も 同じように溺死している。

令嬢 Catherine (詩人の母) は、Duff 家の出の祖母に育てられ Scotland の国民性である厳格で勤儉な気質に鍛えられたのであるが やはり Gordon 家に伝わる過激な性情と衝動的な行動力とを残らず^う襲けていた。

Byron 大尉 (詩人の父) の美しい風貌に接するや 彼女は たちまち 前後も ^{かえり}顧みない熱烈な恋情に燃えたち この危険きわまる人物と結婚した。

新婚まもなく Byron 大尉は 放蕩癖をあらわし Gordon 家の莫大な財産を蕩尽、債鬼をのがれ 夫妻は フランスに渡る。

そこでも 賭博と酒色に耽り 金をせびるときだけ妻のところへ帰るという有様だった。

Catherine は Scotland の女性特有の美德を発揮し 節儉の生計をたてていた。

妊娠して産期が近づくと ロンドンに戻り1788年1月23日 男子を生む。この子が Gight の Gordon 家を相続して Gordon の名のみを譲られた。即ち 詩

人バイロンである。

まもなく 嬰子^{みどりご}をつれ 故郷 Aberdeen にて家具つきのアパートを借りる。
相変らずの放蕩児バイロン大尉は 金をせびりにくるが

1790年の末頃 ふたたび フランスに渡り翌年の夏 窮迫のどんぞこで南佛
Valenciennes にて客死。 ときに1791. 8. 2. —36才であった。

以上が 母方 Gordon 家の家系であり、そして——Byron 家との接点において この詩人が生いたたねばならなかった——ということが“血の詩人”バイロンを端的に極言するのではないだろうか。

詩人の強烈な個性は 英国では 最古の名門貴族の出身であるとの強い誇り——それは異常なまでの—— からくるものであったが その家系の血が 彼の美德 背徳として渦巻いたゆえに 苦悩^{あえ}に喘ぎ^{もだ} 悶えなければならなかった。 誇りと自嘲が 表裏一体となり 残忍と陽気、粗野と気品、自由への熱望と野蛮への奴隷化、を逆説的に雑居させた詩人の心の瞬時の揺れかバイロン文学の光りであり しからずんば 発狂への屈従となったであろう。 この unbalance を調和美として完成したことが 凡庸でない詩人バイロンの偉大さとして これを讃えるべきである。

詩人 Byron の生涯を概観するとき——

放蕩貴族の父は家をすて、Scotland の田舎町で あるいは 暗いバイロン家の古城の廃屋で母と少年 Byron は 淋しく生い育った。

幼年期——誇り と 強い自我 と 憂愁

少年期——思慕 と 意地っぱり

青年期——驕慢 と 奔放な 蕩児

として Cambridge 大学を卒えた。

青春の情熱と憂愁のゆえに苦痛に悶え^{もだ}、耐えかねて巡礼の旅へと発つ^たのであ

るが その ‘Childe Harold’ が「一朝にして高名」となり、Byron は 絢爛として社交界のプリンスとして、上院の若き獅子として熱狂的歓声をもって迎えられた。やがて、しかし、——

Caroline Lamb, 異母姉 Augusta, Annabella, Claire, と いくたの女性との愛欲の絵巻き図をくりひろげ 祖国英国は Byron を 国外追放した。

追放後の Byron は、さらに、Guiccioli 伯爵夫人 Teresa との愛に耽溺し、悔恨と憂愁の日々を重ねるが、最後に、彼の義侠心は死地をもとめて 最後の彼岸への到達を決意した。Byron は その生涯が 自ら描いたドラマであった。神であり 悪魔であった。さわぐ血のゆえに、強さと弱さ、高さと低さ、美しさと醜さ とを浮彫にした詩人であった。

興、到れば、たちどころに成る という、天成の奔放な想像力を駆使して、おそるべき速さで数多くの作品をのこした。

Byron みづから

‘ぼくは、自分の経験や下地がなくては、何事も書くことはできない。 瞬時の passion が、emotion が ぼくの詩の 源泉であり、すなわち ぼくの詩そのものである。 ぼくは ぼくの詩を修正することはしない。その瞬時の詩心 が変質されゆくことを おそれるから。’

と言った如く——

Byron は 投影の詩人であり、人間バイロンの強烈な個性、体験が、すなわち、その瞬時の激情の投影が、“血に呪はれた” バイロン文学の本質であり光り である。

L. Hearn は The English Romantic Poets と題する一連の lectures の中で Byronism に対し, Byron 文学に対し, きわめて 冷やかな 俊厳な メスをあてている。————

“Byron 文学を語るときに 先づ第一に, その非運な出生にふれねばならないだろう。母 Catherine は 不運な結婚により, 新婚生活の充たされない欲求不満の日々を, 異常なまでにヒステリックな, insane な振舞いに及び, 愛児バイロンの出生の時ですら 狂暴に, 愚かに, 振舞い そのために 愛児の右足は生れながらにして すでに畸形であった。

このような 母ゆえに, このような父ゆえに, このような black sheep ‘変り種’ の祖先の多くを輩出した家系のゆえにこそ, Byron の生涯は すでに 兇運の星を背負っていたのである。”

“Byron は 人も羨^{うら}やむほどの, 当代随一の美貌の持主であり, 当時英国の貴族の名流女性の凡てが 溜息^{ためいき}をもらすほどの 深い愁いをふくんだ 美貌に恵まれていた。それは 父親ゆづりのものだったが 同時に Byron は, 父親の激情 そのものも そっくり 承^うけ嗣いでいた。その好悪, の激しさ, 愛と怒りの激しさも かしながら むしろ 詩人の青春の嵐にふさわしいものであり 決して不吉な 邪悪なるものを思わせるものはなかった。

かしながら————

Byron にして, もし, あの不運な結婚がなかったならば, もっと ふんべつのある結婚をしていたならば……。すべての点において Byron は 順風に帆をはらみ, 世の不評を買うことはなかったであろう。祖国追放の悲運をみることはなかったであろう。”

Hearn は, この点を 強調している。

“Byron は 生来 決して浪費家ではなく, 遊蕩によって身を滅^{ほろぼ}すような弱者

ではなかった。それどころか かえって、衰落しゆく Byron 家の家名を興^{おこ}すことが Byron の夢であった。決意であった。

Byron は 名門貴族出の、若き、20才の、美しい、長身、亜麻色の髪の毛の、Annabella Milbanke と、結婚。1815. 1. 2日、27才のときであった。しかし Annabella は、稀にみる、数学に秀でた blue stocking であり 冷徹な 厳しい そして清楚な美をたたえた知性的な女性であった。Byron を慕い 最もよき協力者として献身的に尽したけれども 非凡なる Byron ゆえに Annabella の夢みた 温い、平和な家庭生活は 所詮 彼女にとって Castle in Spain 砂上の樓閣、として 滅びゆく もろき 幻影の美にすぎなかった。やがて 1816. 1. 15, Annabella は 生れたばかりの嬰子、娘 Ada と共に Byron の許を去ってゆき、ふたたび Byron と相見ることではなく 永遠の separation の悲運をたどりゆく。はかなく もろき わづか一年の結婚生活だった。

英国貴族階級の場合、—— 一般庶民階級にとっては たいした支障はないのにひきかえ——結婚生活における蹉跌は 生涯の命運を決めるほど 結婚とは 最も重大な、男性の生涯の一大行事であった。すなわち、それは 世論を決定づけ 将来の彼の社会的地位を意味し、これを要するに 生涯の幸運かしからずんば 絶対的破滅を はっきりと 決定づける最も重要なモーメントとなったのである。

Byron の妻 Annabella が 突然 Byron の許を去り Separation を宣言したとき、世間は いかなる誠実なる女性も Byron なる monster ‘怪物’ とは暮すことはできない と信じこんでしまった。かくて Byron は 悲運の生涯をたどるべく 決定づけられてしまったのである。すべての社会が ただちに彼を白眼視した。華やかに詩界のスターダムにデビューし 若きプリンスとして議会で獅々吼し 社交界の花形として迎えられた貴公子 Byron が——。いまや、すべての世間の冷たい視線を浴びて もはや 英国に住むことはでき

なくなった。彼の生涯の余命は もはや 追放の身 として決定づけられてしまった。英国貴族社会からの冷い処遇であった。Byron は この処遇は不当であると思った。しかし 世間は もう Byron の訴えには 耳をかすことすらしなかった。世間は ただ Lady Byron の言い分のみに 耳を傾けた。

しかも、Lady Byron は 彼女が Byron と離別した その理由は はっきりとみづからの口から これを世間に公表することはしなかった。いや、できなかったのである。何故に？

Lady Byron は 彼女の時代の貴族社会のすべての慣習、から念佛、偽善、を その一身に 具現化 していたのである。

Byron は 幼少時より fighter であった。その不屈の闘志は ‘喧嘩バイロン’ の異名をとった。Byron は 今、世間をすべて 敵にまわすことを すこしも 怖れはしなかった。彼の短い生涯の余生を 彼をうちのめした世間を 逆に うちのめし返すことに生命をかけた。そして 見事に 効果的にこれを うちのめした。

Byron は 情熱の詩人であった。その powerful な 激情の律動の中で 万巻の詩をのこし、生命のかぎりうたいつづけた。そして その中で、英国社会の あらゆる 困襲、偽善、 あらゆる道徳的陳腐さを徹底的にうちのめした。勇氣ある罪は 臆病なる美德 よりも、 魅力的であることの理をうたった。社会的虚偽を 弁護し かくまう 宗教的信仰を 大胆に 真正面より攻撃した。”

Hearn は さらにつづける。悪魔派 Satanic school の リーダー 旗頭としての Byron の真面目の底辺にメスをあてる。

“不幸にして Byron は 社会的偽善を攻撃するのみに満足できなかった。

世間が彼を悪魔である、怪物であるというとき、むしろ、世間をしてこれを正当視させる、大膽不敵な生き方の一つ一つの手本を示す詩を うたいつづけた。そして現実を身をもって そう 生きた。”

新しき酒は 新しき革袋に 盛られなければならない。1987年、——やがて 21世紀を迎えんとする現代 Byron が 示唆したことは われわれの心に鮮しく 訴える。

——考えろ、考えろ！ 善きことも 悪しきこともすべて一所にとどまっていたは、腐るのみである。旧人類の思考は 新人類のモラル へと移行しなければならないのだ！——と 悟すがに。

Hearn は Byron の生き方を さらに切りさく。

“いま—— Byron のおかれた立場は、みづからの口をかりて 言わしめるならば——

‘世間は、私が立派に生きようとするとき私のことを 不道徳漢 呼ばわりする。それなら それで いいさ。お気に召すように、どうぞ 勝手にしたまえ。不道徳漢 で結構だよ、’ と。だが、しかし——

Byron は許せない。追放の処置は ともかくとして、追放後の Italy and elsewhere の Byron の所業は これを黙視することはできない。

その恥知らずの所業の数々を生きたことは、目にあまるものがある。あまつさえ、その Shamelessness 無恥に cruelty 残忍性が 結びつくとき吾人は ‘Byron 追放’ に 一片の同情をすら もはや 投げかけることをしないであろう。

Byron は 女性に対して 残酷であった。そして ときに brutally と思えるほど 残酷であった。”

Byron は みづから たびたび 口にした。‘私は 女性なしに生きることは できない。しかも 私にとって 永遠の愛 というものはないのです’ と。
‘なぜならば、詩人 は 火星人であり、地球人なる女性と契り^{ちぎ}を結んでもやがて 天空へと去ってゆき 地球人の守るべき掟^{おきて}にしたがう義務はないのだから’ と。

新人類バイロン の口にしたことばとして一考に値する。永遠の愛 という虚言^{そらごと}を美しく恋人の耳許で私語いたとて それは 喜劇としてのみ実在するだけだと シニカルな微苦笑を投げかける Satanic Byron は 何を 訓すのだろうか？ 世の美男美女にむかって。

独眼竜 Hearn は 悪魔 Byron を凝視する。

“しかしながら——遂に、善なるバイロンが抬頭する。二つのバイロン が存在したのだ。一つのバイロンは——生来、向うみずの、利己的な、官能的な。いま一つのバイロンは、寛大な、勇敢な、そして真に高貴であった。

この善なるバイロンが はっきりと顕れたのは親友 Shelley の死後であった。Byron は詩をかくことをぶつとりとやめて ギリシャ独立運動のため、自分の全財産、全能力を捧げるべくギリシャにおもむき彼岸に死地を求め 大義に殉じた。

36才という短かった生涯において、その生き方において数多の瑕疵^{きず}はあったとしてもギリシャの地で Byron の、みづから選んだ 殉死は まさしく 一人の英雄の死であった”

“さて、ここで、Byron の生涯を ざっと概観してみよう。1788 に生れ、Harrow そして Cambridge で 所謂、英国貴族 として名門校のエリートコースを経て紳士教育をうけた。しかし ケムブリッジ大学は怠業のゆえに学位をうけず卒業⁽¹⁾”。

註(1) Byron は、実は、貴族の特権により Master of Arts の学位を授与されている。Hearn の誤記である。

“ケムブリッジ大学 在学中 処女詩集 Hours of Idleness ‘懈怠集’ を1807. 6月出版。そしてこれが Edinborough Review 誌によって酷評された。若き Byron は これに激怒し Pope の詩風に倣い、当代の英国のすべての 批評家、そして すべての詩人を相手どり、‘English Bards and Scotch Reviewers’ なる一大諷刺詩を書き 壮絶なまでの舌戦を展開する。生れ出づる新しき世代の俊秀詩人の育成のため 新しき文学の誕生のため起ち上る使命感に燃えて 力強く 精力的に攻撃し 告発し ひとりひとり血祭りにあげてゆく。文壇の腐敗墮落をつき 専横なる権力を徹底的にうちのめした。まさに荒れ狂う、吼える、一匹狼の 姿であった。勝算ありと断ずるや 直ちに筆を収め、旅に出る。二年余の Grand Tour を終えて、1812年 ‘Childe Harold’ を出版。これにより 一躍、世界にむかって 詩人 Byron の名を顕揚する。チャイルド、ハロールドは一月月たらずで 七版を売り切った。

次の三年間で 実に 驚くべし、Byron は矢継ぎ早やに 数々の作品を世に出している。

‘The Giaour’ ‘The Bride of Abydos’ ‘The Corsair’ ‘Lara’ ‘The Siege of Corinth’ の作品に大衆は熱狂的に 酔い 読み耽った。‘The Corsair’ だけでも 14000部が一日で 売りきれた。

この時点では 詩人 Byron の前途は 洋々たるもので 幸運なる未来が 約束されていたのである。しかし――

そのとき あの悲惨な 結婚、が 1814年に始まり、わづか一年にして1815年には、終ったのである。Lady Byron が彼の許を去って3ヶ月後、彼は イタリアへと出国し 以後 故国の土を踏むことはなかった。

Switzerland, Venice, Revenna, Pisa, Genoa, で かなりの年月を送ったのであるが、その間、若き Shelley との交友は、特筆すべき 温い そして お

互に 啓蒙的友情として 育まれていった。 Byron の傑作は すべて この時期に かかっている。

Byron は イタリア時代に数多くの劇詩ものこしている。 ‘Manfred’ ‘Cain’ ‘Sardanapalus’ ‘Marino Faliero’ etc.

そして 詩集 ‘Beppo’, ‘Mazeppa’ ‘The Dream’ ‘Darkness’ そして、かの有名な、最もすばらしい、 未完の ‘Don Juan’ をかいている。 Don Juan は バイロンの作品中の 圧巻であり 最高傑作である。

1823年 バイロンは 詩をかくことを永久にやめて ギリシャ遠征に おもむき 1824年 Missolonghi で 戦病死した。

以上 Byron の生涯の概略の、スケッチであるが、Byron の情熱的生涯と作品が 果して 私達に 何を遺^{のこ}してくれたのだろうか を一考したい。”

“長い間 Byron の名声は世界的なものであった。 Byron の性格、その生涯は それ自体 ロマンであり、その時代の一つの象徴であったが Byron 文学の評価について 批評界はいくつかの問題点を投げかけている。しかし—もう、今や、はつきりと その正しい答はできる と私は思う。” と Hearn は 断じている。

“英国本土のみならず 全ヨーロッパにおいて Byron ほど 広範囲にわたって 突然の名声を博した詩人はない ということは先づ第一に われわれの注目すべきことである。 当時の Byron の名声は あらゆる競争を排除してよせつけなかった。 Byron が詩^{うた}っている間、 いかなる詩人も その詩をきいてもらえなかった。 Byron について言えることは ただ そのことに止らなかった。 Byron の影響は 主として フランス、ロマン主義運動へと波及していった。 ドイツにおいて偉大な詩人 Heine の作品において、その作品を通じて、 Byron の影響が 強く感じられた。 さらに、スペイン、イタリア、ロシアの文学においても すべて Byron の影響力が強く感じられた。 詩聖 Goethe

は Byron を評して英国詩史において Byron の右に出る詩人はいないと断言し、さらに Byron 旋風^{セン}はヨーロッパ的現象であり 何百年の間、ふたびみることはない現象であろう と述べ Byron のヨーロッパ全土に与えた偉大な広範囲にわたった影響力と名声を讃えている。”

“しかも、わづか一世代の間に、Byron の爆発的名声が退潮し 消え失せた。Byron は いまや もう、ほとんど読まれていない。この矛盾をどう説明すれば、よいのだろうか？” と Hearn は冷く批判のメスをあてる。

“私には これを説明できると思う。しかもまことに興味ある方法で。

私の持論は —— 一貫した考は —— 詩及び散文における、すべての偉れた創作 に関して重要な一つの事実は、創作は、辛抱強い自制が絶対必要である ということである。文学は 真剣な労作を意味する、たとへ いかなる天才がその背後に潜んでいようと。そして文学は その労作に必要な自制を意味する。私はここで 単なる道徳的自制を述べているのではない。その生活面において正しい振舞はなくとも 作品面において光輝を放つ 数々のケースはありうるであろう。しかしながら——道徳的、知的自制は 併進しなければならない という一般的真理は これを逃れることはできない。何故ならば、一方において みづからを克服できない詩人はややもすれば他方において みづからを克服することを至難と感ずるであろうから。さて Byron は この真理の正に当てはまる 恰好の例としての存在であった。

Byron 詩がもはや、若者によって以外のかえりみられなくなったのは、耽読されることなく重んじられなくなったのは、実に、Byron 詩が 忍耐なく、自制なく、ゆえに、激情表現の推稿なく、真の芸術的精神なく、easy に 詩^{うた}われたことのゆえである。すべての芸術は 持続された努力という生みの苦しみを必要とするからである。そして最高の意味での持続された努力は Byron の場合、考えられない、ありえないことだったのである。”

しかし Hearn の Byron 詩 批判において—— Byron みづから 積極的にその点を認めて、自制、推稿は自分の場合、考えられない、ありえないことだった——と述べた Byron の所信を考えるならば Byron 詩は その原点において そもそも、Hearn の持論と 真向うから 対峙^ちしているのであって 最初から Byron 詩批判、いや Byron 詩への攻撃、批判としての的を得たものではないであろう。すなわち——

Hearn は ここで Byron 自身のことばを逆手^{さかて}にとって Byron 詩 攻撃への一つの材料として 挙げている。

“実に、Byron は 勇気をもって——自我の強い、誇り高き詩人 Byron にとってそれは 勇気の要る告白であったが—— その晩年 次のように告白している。

‘自分は詩人としては不向きであった。だから生涯の職業として詩人の道を選んだのは まちがっていた’ とみづから述べている⁽²⁾。

註(2) Byron の、このことばは、詩人として世に貢献できることは 微力である。それならば 自分は 軍人として、そして 政治家として 自信のある道を、選ぶべきだったと述べるのが Byron の真意であったので、その意味でなく、Byron の告白の真意を汲むことなく、Hearn が Byron の告白を そのまま、もろに うけとめたのは 承服し難い。

“Byron のこの告白は いかにも そのとおり 全く真実だった。詩とは そもそも品格的諸々の資質を必要とするので Byron の品性の中には全くそれがなかったのである。他の作家群が散文をかく如く easy に 韻文をかくことができる天賦の才に恵まれて、Byron は 名鳥がその美しいこえで囀^{さえず}る如く 詩をつぎつぎと 吐き出していったが それは その瞬間瞬間の心、激情の吐露にすぎなかったで、その唄声には すこしの努力も拂はれなかった。

一片の推稿もなされない、生^{なま}のこえの露^{あら}はな表現にすぎなかった。だから Byron は 大衆へのすばらしい成功、反響を知ったとき ‘passion, すなわち, emotion が poetry である と考えた。そして しばしば そのことを口にした。これは 大変なまちがいである。錯覚である⁽³⁾。

註(3) Byron が ‘passion が poetry なり’ と考えたのは 大衆への成功を知ってからではない。Byron は推稿によって passion の力強さが消失しあるいは変質してゆくことを怖れたから、瞬間の激情を大切にしたのである。この点、Byron は ‘力’ の詩人であることを Shelley も認めている。本邦の詩人 啄木の歌論が瞬間の心の記録を最も重要視したことと、この点、酷似した Byron の詩観が彼の詩観の真随である。その点、Hearn の詩観が、たとえ、伝統的、正統的であるとしても Hearn の詩観と Byron の詩観はその出発点において、完全に対立している。

“passion は poetry ではない。みづからの感情を韻文に表現することが詩ではない。それは poem の芽生えであり胚珠^{ハイシュ}にすぎないのである。ブロンズの像を創るのもこれに似て、金属材をかたにつくりあげることは 完成された真の芸術作品としてのブロンズ像の手初めにすぎない。その後の手直し、修正、磨きをかける労力がなければならない。

Byron は絶対に この、手直し、修正、研磨の労をとることをしなかった。Byron は自分の感情を ただ単に紙面に投げつけるのみで easy に詩行をライムさせ、その後は いつまでも そのまま放置しておいた。ゆえに そのうたは つねに いつまでも 欠陥だらけなものにとどまった。

Byron は 自ら^{みづか}について、自ら^{みづか}の情緒について のべている。

The cold in crime are cold in blood,
 Their passion scarce deserves the name;
 But mine was like the raging flood
 That boils in Ætna's breast of flame.

罪の意識に 冷やかなるもの
 汝の血は 凍^いてつきて
 その激情といえども
 名に値せず
 されど 吾^あが熱血は
 たとへば 猛^{たけ}り狂う
 溶岩流に 似て
 エトナの火の山に噴^ふきあぐる

この詩行は Byronic heroes の一人 をして云はしめたものであるが Byron 自身の気持を表現したものとして考えてよいだろう。

さて、ここでエトナの火山の溶岩流が芸術的目的に奉仕されるのであるならば、それは 充分注意深く精選されなければならない。何故なれば、それは噴火口からありとあらゆる dross^{かす}不純物が混入して ほとぼしり流出されるから。

かくして Byron 詩は その熱血において力強さにおいて lava 溶岩に似ている。だがそれは同時に dross のみちみちた lava なのである。Byron 詩の中で、完璧と呼ばれうる詩行は せいぜい 20行を数えることはできないであろう。Byron 詩には 光輝^{かがやき}がある。華麗さがある。しかし それは常に原石、鉾石の形態をとる。

この偉大なる天才 Byron は、最善を尽すことをしなかった。最善を尽そうとする気持をいささかも持ち合はせなかった。また、その気持をもとうとすることさえできなかったのであろう。何故ならば Byron には その努力を助長するに必要な辛抱強い自制心をもち合はせなかったから。批評家の中には、Byron は 真の詩は一篇も書いてないというものもいる。

これら批評家の評言が ‘完全な形態、絶対に完全な詩’ を意味するのであれば Byron には最高義^{きぎ}での詩は一篇もかかなかったことを、われわれは認めざ

るをえないのではないだろうか。明かに Byron の はかり知れないほどの影響力のよってきたる理由、根源を究明するとき、それは Byron 詩の作品に対してではないのである。その理由は別に求めねばならぬ。そして、その究明のためここですこしばかり 道草を食むことにしよう。”

(未完。続次号へ)

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge, The Poetical Works of Lord Byron: Lewis Prints.
- 3) Leslie, A. Marchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John, D. Jump, Byron: Routledge and Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂.